

<p>上演 6</p> <p>2022年8月 1日(日) 1校目</p> <p>九州 ブロック (大分県)</p> <p>大分県立 三重総合 高等学校</p> <p>『ねえMAMA…』</p> <p>～羊群に紛れる猫と猿山を見上げる犬～</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(東京都) 東京都立小石川中等教育学校</p> <p>鬼頭 すみれ</p>
--	---

「自分の力で得たもので戦うということ」「生きる上で疑うこと」「平等」といったことを観ているものにこれでもか、これでもかと訴えかけてくる作品であった。見終わったあとの議論では、それらのことは「世界の秩序なのではないか」という結論に達した。

管理された社会の中で生きていく人間たち、決まりだからと何の疑問も持たずに生活し反射的に祈り、闘うことを諦めてしまう。自分のことだけでなく、周りのことにも目を向け、様々な角度から世の中を歩き、闘っていく必要があることを教えてくれたこの作品のラストシーンで雪村が言い放ったメッセージは強烈なインパクトを観客に残した。度肝を抜かれるとはこのようなことなのだと実感した講評委員もいた。

役者の統制の取れた動き、発声、舞台セット、音響や照明の緻密さ等、何もかもが秀逸で、60分という時間があったという間の作品だった。様々な演出効果から美しさを感じる一方で恐怖を感じる、一演劇部員として学ばせてもらうことの多い作品であった。部屋、教室の四角い照明、海に浮かぶ小舟、区切られた場所と観客に一瞬でどういったシーンかを分からせる演出もすごさを感じた。特に中央にあった大きな三角形のマークはとても不気味で、効果的でもあった。使われている映像も迫力があり、観ているものに恐怖を与えるには非常に効果的な演出だったと感じる。

また、リアルに感じられるシーン、例えば親子での食卓での会話シーン。学校のことやお金がないことに関する会話をするシーンでは、感情のこもった会話を丁寧に行う姿があり、役者の方々の意識の高さやスキルの高さを感じさせられた。

恐怖を感じながら観ていたこの作品、見終わったあとに、「普段何も疑わずに生きていてそれでいいのか」と投げかけられた感じがして、心が苦しくなった講評委員もいた。雪村のセリフ、「疑問を持つことはいいことよ」。コロナウィルスの情勢にただ追従するだけじゃなく、ちゃんと自分自身で考え抜いて行動をする必要があると再確認させられた舞台であった。